

2024年04月05,06日の三島視察研修体験を通じて

早稲田大学創造理工学研究科建設工学専攻

修士1年 藤本秀哉

私にとって初めて訪れた場所であった三島は、市街地も周辺の自然環境もすごく居心地の良い場所だった。研究室の先輩の太田さんがグラウンドワーク三島で住み込みで働いており、太田さんの普段のゼミ発表での言葉と写真からそこでの活動の様子を見ていたが、その多く周辺情報を取りこぼしていた。しかし、実際に訪れ、環境に手を入れたことで、三島とその周辺エリアがどういう場所なのか、その輪郭を掴みかけている。

実際に手を動かしていくなかで、頭の中にぼわっと浮かんだことを言葉に書き起こしておこうと思う。それは、わたしたちが一つの場所で一つのビジョンを持って共に活動することが生み出す「わたしと他者の関係」、そして、「わたしたちとまちとの関係」について。

大場里山の草刈りでは、草刈り機を操ることができる実和さん・中田さんが草を刈り、残りの先生や学生が刈られた草を拾い集め、ゴミを拾う。お互いが、お互いの作業を邪魔しないように気をつけながら。

松毛川での植林では、私たち学生が二人一組で一つずつ確認しながらその作業工程を少しずつリファインして進めていく。葉先生は、途中で腰が痛くなりリタイアしたけれども、声を出してその場の空気を少し色付けていく。実和さんや中田さんは、そんな辿々しい素人の作業の様子を横に見て黙々と作業をしながらも、苗を植える場所の土を先回りして掘り、散らばったビニール製の育苗ポットを拾って、無くなったバケツの水を汲みに行き、大変な作業を少しずつ楽しんで下さっていた。

草刈りでも植林でも、その場にいた全員がその空間の構成員となり、お互いを気にしながら作業していた。そのようなバーバル・ノンバーバル問わず相互に気にかける行為の連続が、わたしたちは同じ世界にいるんだという感覚を生み出していたように感じる。よりより社会に向けて、よりよい地域に向けて今を進めていくためには、数年先のちょっと良くなった未来の世界を、その世界を構成する「わたしたちで」共有し、そして実際にみんなで手と足を動かして形作っていくことが必要なのだろう。これが、三島での活動を通じて感じ取ることができた「わたしと他者の関係」。

自らの手によって、土を掘り、木を植えて肥料と水を与える。そうした、実際に自然（ネイチャー）と接触する経験によって、目の前に表れるわたしの風景は、触れ合う前とは全く異なるものになっていった。視覚的に整った、綺麗になったというように変化するだけでなく、それを眺めることで生まれる（愛情なのか）自らの心情にも変化が表れた。この地にまた5年後、10年後、木々が育った様子を観に行きたい、この風景が見られるこの地に住んでみたい、この地で働きたいと思えるようになる。わたしたちが実際に環境に関与することから生まれる風景への愛着、ひいては地域に対する愛着があることを確認することができた。これが、活動を通じて感じ取ることができた「わたしたちとまちの関係」。

「実際に手を動かす」・「みんなでやる」。これが『右手にスコップ、左手に缶ビール』のキーワードに通ずるのだろうかと考えを巡らせながら、松毛川の緑地に木を植えていた。

最後に、ここまで整理して気がついたこと。では、実際に手を動かすための「みんなを集める」ためにはどうしたらいいのか。耕作放棄地や放置された里山は増加し、社会問題にもなっている。かつては、地域の共有地として土地を皆で管理することが行われていたが、現代では難しくなっている。地域のコミュニティというもの以前と比べて格段に薄れ、関わりしろが時代とともに無くなっていく。そうした社会状況の中で、人を集めるためには何が必要なのだろうか。グラウンドワーク三島の渡辺さんは、地域の危機に声を張り上げ、どんどん人を引き込んで、「みんなを集める」ために一つの大きな役割を果たしている。もちろん、それに参加する人も「みんなを集める」ために寄与している。特に参加はしていないけれど、それを側で見ている人もその空間の風景を作っているという点では参加者になりうるだろう。一緒にやろうと声をかける人、それに乗る人、それを側から見人。「参加のデザイン」という言葉があるように、自分の地域のことを自分ごととして捉える人を増やすために、これからは人の繋がりについて考えることもインフラの整備と同じぐらい重要になると感じた。

自分の地元を考えた時、わたし自身には何ができるのだろうか。今回はたくさんの経験をすることができました、ありがとうございました。これからも、たくさんのことを学び、研鑽します。